安心・安全社会への視座と課題

―日本・アジア・欧米の対比を通して―

社会知性開発研究センター／社会関係資本研究センター主催シンポジウム

社会知性開発研究センター／社会関係資本研究センター主催の平成22年度シンポジウム「安心・安全社会への視座と課題―日本・アジア・欧米の対比を通して―」が12月11日、神田キャンパスで開催され、基調講演とパネルディスカッションが行われた。

▲ パネルディスカッションで会場からの質疑に答える神野氏（中央）

はじめに原田博夫代表（大学院経済学研究科長、経済学部教授）が同センターの活動を説明。問題提起として、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）の概念を述べ、議会会長、政府税制調査会専門家委員会委員長を務める神野直彦・東京大学名誉教授が「安心・安全社会の市民的基盤」をテーマに行った。社会保障のあり方について、最低保障の維持を目的とするアングロサクソンモデル、最低基準の引き上げを目指すヨーロッパモデルとスカンジナビアモデルを紹介。「日本はアングロサクソンモデルを取り入れ、保育や介護などの負担を家庭に依存してきた。近年はこのシステムが破綻し、政府も担いきれなくなった。今後は市民が基盤となって支えあう新たなシステムが必要である」と結んだ。

揺らぐ日本の基盤構造

市民主体のシステムも提言

「近年の日本は、社会の治安を保持するための家族や地域共同団体、社会的組織の構造や機能に揺らぎが見られる。世界の各地域と比較することで、その問題点を掘り下げたい」と狙いを話した。

基調講演は地方財政審議会会長、政府税制調査会専門家委員会委員長を務める神野直彦・東京大学名誉教授が「安心・安全社会の市民的基盤」をテーマに行った。社会保障のあり方について、最低保障の維持を目的とする

続いて原田代表がモデレーターを務め、パネルディスカッションが催された。神野氏に林省吾氏（同センター客員研究員、㈶地域創造理事長）、大塚洋一郎氏（NPO法人農商工連携サポートセンター代表理事）、前田正尚氏（㈱日本政策投資銀行常務執行役員関西支店長・設備投資研究所主任研究員）を加え、活発に意見が交わされた。

大学院商学研究科・東京信用保証協会第７回共同公開講座

中小企業がとるべき国際戦略とは

大学院商学研究科（上田和勇研究科長）と東京信用保証協会による第7回共同公開講座「中小企業経営の国際戦略」が12月4日、神田キャンパスで開催され、中小企業経営者や後継者、学生など約100人が参加した。

▲ 会場からの質問に答える丑込氏（右から２人目）

開催の趣旨説明をする上田研究科長

まず小林守商学部准教授が「東南アジアにおける中小企業経営～日系中小企業の課題と東南アジア企業から学ぶこと」をテーマに講演。1997年のアジア通貨危機の影響による東南アジア企業のさまざまな変化を概観するとともに、東南アジア企業が実践する独特な商習慣などを紹介し、日本企業が学ぶべきことや、進出を果たした日系企業の今後の課題を探った。

続いて、㈱アジアインフォネット専務取締役の丑込歩氏が、「中国市場における日系中小企業の成功要因」と題し、日本企業の中国進出の実態や、中国市場が抱える諸問題、投資のリスクなどについて講演を行った。

パネルディスカッションでは、上田研究科長がコーディネーターを務め、小林准教授、丑込氏に加え、鹿住倫世商学部教授、㈱日本仙林企業代表取締役で城西大学客員教授の誉清輝氏がパネラーとなり、中小企業経営の国際戦略について活発な意見交換が行われた。

多数の学生が積極的に質問

日本の再建支援に期待

イラク駐日大使が講演

法学部学術講演会が12月9日、神田キャンパスで、学生ら150人が参加して開催された。講師は駐日イラク大使のルクマン・フェーリ氏。

▲ ルクマン・フェーリ大使（右）と広瀬崇子教授

イラクではアメリカ軍やNATO（北大西洋条約機構）軍の撤退が始まったが、国内情勢は依然、混沌としている。内外から政治的な安定や治安の回復が求められている。こうした状況下、ルクマン大使は、イラクの現地情勢や復興にむけた動きについて1時間半にわたって講演した。進行は広瀬崇子教授が務めた。

古代シュメール語で「緑」を意味するイラク。複数の文明揺籃（ようらん）の地だ。同大使は「多民族による多様性に満ちた国。それがいまのイラク情勢に影響を及ぼしている」と語った。さらに、第一次世界大戦後、不自然な直線の国境にされて現在のイラクになる。この人為的国境が90年経った今でも問題を抱えることになる――と、イラクの歴史をひもとき、混迷から抜け出すには、イラク人とは何か、歴史的に社会的に考えることが「カギ」であるとした。

▲ 会場の学生から活発な質問が……

同大使は、シーア派のクルド人で、スンニ派のサダム・フセインの時代に弾圧を受け、国外に出た体験があることも明かした。

35年にわたるフセイン独裁政権により、経済制裁を受けた結果、国土は疲弊。医師不足、失業率悪化、学校不足、国家債務や国家補助依存者の増大などに苦しんだ。

しかし、イラクの治安、社会経済体制は日々、改善されつつある。米軍は2011年末に予定通り撤退するだろうが、自国の治安は自国が守るべきだと強調。世界第3位の石油埋蔵量が再建の原動力になると語った。

さらに日本の支援が大きな力になる――と期待を示した。

また、今のイラクは軍事力ではなく話し合いで国内問題を解決しようとしている。民主主義国家を作るには大きなエネルギーがいるが、文化的側面を考え、民主主義を自分たちの形に変えていく必要がある――と語った。「対話の力を信じ、治安を回復させ、健康的な社会を作りたい」と締めくくった。

ルクマン大使は講義後、「日本人はシャイで発言を好まないと聞いた。それは誤解であることを望む」と活発な質問を呼び掛けた。学生たちはそれに応じ30分以上、次々と質問した。同大使は楽しんで答え、「またぜひ専大で講演をしたい」と話していた。

平井宜雄教授が日本学士院の新会員に

12月13日、日本学士院の総会において、本学法科大学院前院長の平井宜雄教授が、日本学士院の新会員に選定された。

日本学士院は、学術上功績顕著な科学者を顕彰するための機関として文部科学省に設置されており、学術の発達に寄与するための必要な事業（授賞、紀要発行、国際学士院連合における史料編纂（へんさん）活動、外国アカデミーとの会員交流など）を行うことを目的としている。

学位取得

卒業延期制度について

板坂則子文学部教授―写真―が、11月26日付で東京大学から博士（文学）の学位を授与された。学位論文名は「曲亭馬琴の世界　戯作とその周縁」。

平成23年3月卒業予定の在学生で、卒業要件を満たしたのち、平成23年4月から在学期間の延長を希望する者に対して、卒業延期制度を導入することが決定しました。

この制度は、さまざまな事由により、卒業要件単位を修得してもなお、更なる自己のキャリアアップや資格取得を目指すという明確な目標を持って、本学での勉学を継続したいという、強い意志を持った学生諸君に対し、その道を開くものです。

詳細については、学内掲示および専修大学在学生／教員向けポータルサイトにより、学生に対してお知らせしています。

（教務課・二部事務課）

訃報

山崎　悠基氏（やまざき・ゆうき）名誉教授・元法学部教授

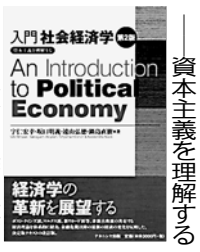
12月19日、心不全のため78歳で死去。1963年から在職。2003年定年退職。主な担当は手形法小切手法。

専修人の新しい本

入門社会経済学［第2版］

―資本主義を理解する

坂口明義ほか著



ポスト・ケインズ派、マルクス派、新リカード派といった社会経済学の諸潮流が共有する最新の経済理論をベースにした経済学の入門テキスト。マルクス『資本論』の構成に沿った従来の他のテキストからは一線を画している点に、新しいテキストを作ろうという執筆者たちの意欲が窺われる。

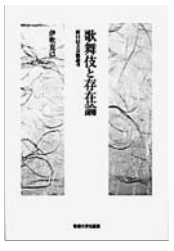
資本主義経済の基本構造・制度的基礎・動態に三部構成でアプローチしているが、どの部分にも最新の社会経済学の成果が活かされている。本書の読者に現実経済を見る目を豊かにしてもらいたいというのが執筆者たちの願いである。2004年刊行の初版が好評だったのでリニューアルしての刊行の運びとなった。（ナカニシヤ出版・本体3000円＋税）

共著者（さかぐち・あきよし）＝経済学部教授。主な担当は金融論。

歌舞伎と存在論

―折口信夫芸能論考―

伊吹　克己著



国文学者にして民俗学者の折口信夫には歌舞伎に言及した文章が多く残されている。それは学問的な論文ではなく、批評ないし感想文という体裁をとった。歌舞伎は折口が幼少より好んだものである。そして、彼はそれを、今日多くの人が考えるように古典芸術ではなく、歌謡曲のような大衆芸能だと主張してはばからなかった。そこに彼の学問の方法の秘密が示されているのではないか。それは先端的な現代思想の理論と対比させてはじめて見えてくる。それだけ折口の学問は孤立したものであったということでもある。折口学の今日的意義を問う著作である。（専修大学出版局・本体2800円＋税）

著者（いぶき・かつみ）＝文学部教授。主な担当は現代思想史。

戦死とアメリカ

南北戦争62万人の死の意味

ドルー・ギルピン・ファウスト著

黒沢眞里子訳

アメリカ史上最大の62万人の死者を出した南北戦争を扱った本書は、ただひたすら戦争の「死」を追究し、当時の手紙や日記に当たり、死ぬこと、殺すこと、喪に服すること、埋葬することなど、死の諸相を、個人の体験を切り口として明らかにしている。緻密な学術書でありながら米国でベストセラーとなった。日本でも朝日、読売、日経等の書評で大きく取りあげられ、「近代国家と戦争と鎮魂の歴史」の必読書と評価された。人間の意味、生の意味をそのままナラティブとして分析する意味論、人間的アイデンティティ論として、広い層の読者に読まれるべき本である。著者はハーバード大学初の女性学長で米国南部史家（彩流社・本体3800円＋税）。

訳者（くろさわ・まりこ）＝文学部准教授。主な担当はアメリカの歴史と文化。